

般若寺 十一面観音立像をみる



般若寺 十一面観音立像

宕陰の檜原高見町にある天台宗の寺院、般若寺には、「十一面観音立像」（以下、般若寺像）が安置されています。

般若寺像は、京都市指定文化財であり、カヤの木材を利用した一木造、増高は一七五・七センチメートルです。今回の歴史調査では、この般若寺像を取り上げます。

十一面観音とは、その名の通り、また像を見ても分かるように、頭部に十一の顔を持ち、左手に蓮華を挿した水瓶を持つ観音菩薩です。六観音の一つであり、修羅道（争いの世界、争う人の心）の者を救う役割を果たしています。

インドにおけるヒンドゥー教の多面多臂（ためんたひ）の変化身の影響によって七世紀ころに成立したと考えられています。日本には七世紀後半ごろから信仰され、奈良時代以降の像が今も各地に残っています。

般若寺像が作られた時代

—古密教系の特徴—

般若寺像が作られた時期としては、九世紀初頭、平安初期と考えられています。

この時期は弘仁・貞観文化といわれており、仏教については、空海が大陸から真言密教を広め、インド的な様相に、奈良時代の天平文化の流れを汲む仏像が多く制作された時期です。

天平文化の像の例としては、奈良県桜井市の聖林寺にある乾漆十一面観音像があります。この像を見てみると、ほっそりとして均整がとれており、静かな姿をしています。

これに対して、弘仁・貞観文化の像の例としては、奈良県奈良市の法華寺にある十一面観音像があります。

こちらはポッチャリとしていて、右足は膝から浮かせて少し前方に踏み出し、親指の先を軽く跳ね上げており、今にも動き出しそうな姿をしています。

ただ、弘仁・貞観文化の像といってもひとくくりにはできず、法華寺像が天平時代の風格をそなえつつ、密教の影響をよく表した傑作とされている一方、飛鳥時代以来存在してきた古密教系（インド的な）の像が多く作られたのもこの時代です。



奈良県 法華寺 十一面観音立像
<https://hokkejimonzeki.or.jp/>より



奈良県 聖林寺 十一面観音立像
<http://www.shorinji-temple.jp/>より

般若寺の十一面観音立像は飛鳥時代以来の古密教系の様式を強く反映するものと考えられています。古密教の特徴のうち三つを取り上げて般若寺像をみてみます。

① 「歪み」

古密教系の様式の特徴としては、まず「歪み」があるということです。通常の仏像は左右対称であったり、上半身と下半身の均整が取れているなどの整齊感が重要視されています。

これに対して、古密教系の場合は左右対称ではなかったり、異常にウエストの位置が高かったり、身体を捻ったような姿をしているなどの「歪み」が見られます。

般若寺像をみると、すらりと痩身であるという印象を受けます。ただ、ウエストの位置が高く、腰から下が大変長いです。左足をわずかに前に突き出し、上半身が向かって左に傾いており、「歪み」の特徴はありますが、「歪み」というよりは、しなやかさを感じさせます。

② 異常な衣文表現

そして、異常なまでの衣文表現です。古密教系の仏像の衣文は、クギでひっかいたような強靱な力を感じさせるものや、ノコギリの歯のように鋭く立つものなどです。

般若寺像の場合、腰から下の衣文は、全体的に浅彫りではありますが、幾重にも緻密なまでに刻まれています。

③ 威相

また、如来や菩薩の仏像は大抵、寂靜や慈悲を表す優しそうな表情をしています。

しかし、古密教系如来像・菩薩像の中には強烈な厳しさや、奇異な感じを印象付けるような表情をしている像があります。例えば、神護寺の薬師如来立像が例として挙げられます。

般若寺像の場合、表情としては、目鼻口に後などが入っているようで、眼線の彫り起こしている、菩薩像特有の慈悲的な表情をしているのです、目が釣り目気味なところからかどこかしら古密教系の威相に通じる印象を受けます。

「歪み」「異常なまでの衣文表現」「威相」これらの特異な特徴は、霊威的な表現を試みたものと考えられています。

それは、平安時代初期に始まった「怨霊への畏怖」という思想とも関連します。人々を脅かすような天災や疫病の発生を、怨みを持って死んだり非業の死を遂げた人間の「怨霊」のしわざと見なして畏怖し、その怨霊を退散させる役割が期待されたゆえの表現だったのではないのでしょうか。

いつ作られたのか？

さて、この檜原の十一面観音立像は、もともとこの地にあったというわけではなく、安土・桃山時代、ある皇女が奈良よりこの地に遷し、般若寺の近くにあった興禅寺の本尊として安置したということです。その後、般若寺に遷されて現在に至るといふことです。そのためか、やはり地方的な古像とみることができません。

作られた時代としては、平安時代初期に作られたのは確からしいのですが、具体的な年代については諸説あります。

① 九世紀の作とみる見解

「天衣や条帛をうねるような衣文線で構成し、一見して唐招提寺や大安寺の木彫群を連想させる。とはいえ上記諸像が、衣文を深く刻むのにくらべると本像の衣文は浅く彫りあらわされている点で違いがある。また、本像のやや前傾した姿勢は天平彫刻というよりは、九世紀の製作とみなされる観音像などによくみられるものである。・・・本像が、上記のような特徴を持つのも、天平時代の名残を色濃く残す奈良において九世紀になってから製作されたもの、と考えれば納得がいくのではないだろうか。」

（『最澄と天台の国宝展』図録く解説・浅瀬毅、二〇〇六年）

② 十世紀末の作とみる見解

「こうした古式の一木彫成像としては、体軀の量感をかなり減じ、軀の厚みも少ないが、上半身の肉どりににはなお抑揚があり、腰高にまとった裳には、翻波を混えてにぎやかに衣文をあしらうが、その彫りは浅く、鈍い。・・・」

（『京都の美術工芸く京都市内編・上』京都府文化財保護基金・一九八五年）

般若寺像と同じような特徴を有する仏像の例としては、徳島県の井戸寺十一面観音立像、長岡京市の光明寺千手観音立像、奈良県の世尊寺十一面観音立像、滋賀県の東門院十一面観音立像などに見られます。これらの像についても、平安初期の作ごろと評価されていますが、説によっては奈良時代にさかのぼる可能性も否定できないとのことです。

いずれにしても、宕陰が誇る文化財には間違いないと思います。未来に向けて守り続けていただきたいものです。

ほか参考文献

- ・『古佛～彫像のイコノロジー』井上正著 法蔵館 1986年
- ・『仏像 心とかたち』望月信成・佐和隆研・梅原猛著 NHKブックス 1965年